

巻頭言

研究に取り組む姿勢と本ジャーナルの活用

本学3年次生の必修科目である研究方法論の授業の中で、私が必ず紹介するのが1924年から8年間にわたりシカゴにあるホーソン工場を中心に行われたホーソン研究である。あまりにも有名な話なので多くの方がご存じと思うが、概略を紹介させていただく。最初は照明の明るさと作業効率との関連を明らかにするための実験研究であった。しかし、そこに関連性は見られなかったため、次に室温や休憩時間、賃金等の客観的要因と作業効率との関連について調査を行う。しかし、またしても関連性は見られず、3つ目の調査として大規模な面接が行われた。その結果、労働意欲が個人属性や職場の人間関係によって変化することが考えられ、第4の調査として別集団による共同作業の成果が計測され、この結果により、インフォーマルな小集団内の関係性によって作業効率が変化することが明らかになったのである。

研究手法等で異論も多い研究ではあるが、この研究から多くの学びを得ることができる。この研究で見いだされたホーソン効果、つまり、人は観察されているという認識によって作業効率が上昇するという知見もそうであるが、研究に対する姿勢も見習うべき点がある。私たちは1度假説を立ててしまうとそれにとらわれ、仮説が立証できないことに苛立ったり、ダメな研究だったと卑下しがちであるが、研究結果を素直に受けとめること、またそれを基に別の発想に切り替えていくことも重要であり、この姿勢によって予期しなかった新たな知見が見いだされる可能性を、この研究は教えてくれているのではないだろうか。

研究初心者もベテランも自分の研究結果が期待と違っていても、その意味を真摯に受け止め、振り返りつつ様々な角度から検証してみたい。そして、見いだされた結果は自信をもって整理し、まずはこのジャーナルを自分の飛躍のファーストステップとして利用し、研究の深みと幅を広げて行ってほしいと考える。

2020年3月

広島国際大学 看護学部長

山崎登志子